2回が　6人
1回が　4人
0回が　3人

で子供の創造から出た話の中ではたくさんは出て来ていないが、これを話の量と比べてみた。語数ではかることは特に幼児の場合語法上の問題が多いのでかなでかいたその字数と比較してみた（促音はぬかす）結果は次の通りでした。

理由の「から」の多い7回6回の3人と、それの少ない0回の3人の比較

「から」の7回のもの　1775字（女）　1128字（男）
6回のもの　1229字（女）
0回のもの　472字（男）　639字（女）　1129字（男）

この6人の中、0の1129字の男はクラスの中でも知能の程度が低い方であとの5人は知能検査の結果からもふつう以上の子供である。例が少ないので結論とまではゆかないが話の量、語い、の豊かな、想像力思考力に富んでいる子供に理由の「から」が多く、知能程度が低く、話の量の少ない、思考力想像力の貧しいものに、理由の「から」が少い傾向があるといえよう。

話の理解について考えるときは子供の思考活動の発達についてあわせて考えてゆかねばならないと思われる。

又記憶していることと理解したことについての関連についても更に研究しなければならないと思う。これらについても考えあわせて、話の理解についての実験的な調査を継続し、こどもに聞かせる話の程度や段階の基準をどのように考えたらよいかについて研究したいと思っている。

幼児の言語表現と繪画表現の関連

東京高等保育学校　内山憲尚

一

幼児の生活表現のうち、言語表現と絵画表現との間には非常に類似のものが存在するのである。結論的に言えば、言語表現と絵画表現との関連に於て共通的なものが大部分を占めているということが出来る。これは幼児の生活表現は一つは言語によってなされ、一つ

は手指によってなされるということによるものではなかろうか。即ち心の動きが一つは音声という器管によって表わされ、一つは、手指によって表わされるという発表器管の差だけのことであると考えられるのである。

二

幼児の言語表現と絵画表現の関連性を表示すれば次の如し。

項／表現	言語表現	絵画表現
1想像的	擬人化・空想的	考えた通り描く
2模倣的	先の子供の発表を真似る	隣りの子供の絵を真似る
3衝動的	思いつきを話す	気に向いたもののみ描く
4自己中心的	自己本位	自分の興味あるもののみ選ぶ
5象徴的	幼児の謎・生活発表	アンバランス・キュビズム
6対象の区別	自他の区別	遠近の区別がない
7エディプスコンプレックス	お母さんの馬鹿などと云う・どもり	絵画による圧迫感の解放
8時間的観念	時の観念の混同	時間的経過の無視
9概念的	大ざっぱな表現	写実性の欠如
10省略	動詞助詞の省略	部分的省略

1、想像的　幼児はすべてのものに生命を与え、所謂アニミズム的な表現をする。言語表現もすべて空想的であり擬人的である。

幼児の絵画は想像的であって、現実から離れ、自分の思う通り、考えた通りに表現するものである。先年幼稚園で秋の遠足をした。この日は大変熱い日だった。帰った翌日遠足の絵を描かせたら一人の幼児は太陽を四つならべて描いている。「これはどうしたのですか」と聞くと「だって先生、あの日はとても熱かったから」と答えて平気でいる。幼児にとっては太陽さえも自由に作ることが出来るのである。

2、模倣的　幼児は非常に模倣的である。幼児に自由発表をやらせると独創力のない子供は、自分の前に言った子供の発表そのままを真似て言うことがある。同じことが絵画についても言える。描けない子供は常に隣りの子供の真似をしている。

3、衝動的　幼児の言語発表には思いつきのものが多い。その場で考え、その時に思ったことをそのまゝ発表する。先日幼稚園の近くにお葬式があって花環が六つならんでいた。その前を通って来た幼児たちが互に話しているのを聞くと「お葬式があったよ」「そうだよ、六人死んだよ」「そうだ、お父さんとお母さんと姉さんと子供と赤ちゃんだよ」「大きいのはお父さんで、小さいのは赤ちゃんだよ」と言っていた。

絵画に於いても幼児たちは、思いついたものを思いついたままに描くのである。

4、自己中心的　幼児の言語活動は自己を中心として行われる。他人の言葉を無視して自己の主張だけを語ることさえある。

絵画に於いても自己の興味あるものを選び、自分を中心として描くのが常である。

5、象徴的　幼児に生活発表や、謎をやらせて見ると象徴的な表現をする。生活全体を発表するようなことはなく、その中心をなす一部分を捉えて全体を現わさんとすることが多い。

絵画に於けるアンバランスが平然と行われ、興味ある部分が誇張されて表現されるのや、幼児に於けるキュビズム即ち立体的、印象的表現（ピカソの如き）もこれの現われである。

6、対象の区別　言語生活に於て自他の区別を混同したり、敬称をとりちがえたりすることがあるが、絵画に於ても遠近の区別がなく、一部分が平面的で一部分が透視図的であったりすることが多い。

7、エディプスコンプレックス　幼児はよく「お母さんの馬鹿」とか、「あんた大きらい」などということがある。圧迫感からは難発性のどもりになることがある。

絵画に於て、自分の好まないものを、ぬりつぶしたり、線を引いて抹殺するようなことをするのはエディプスコンプレックスの現われである。

8、時間的観念　幼児はよく「昨日お母さんと三越へ行くの」とか「あした、お母さんと田舎へ行ったの」とか、時間の観念をまちがうことが多い。又童話に於ける多くの時の観念の欠除がある。

絵画に於て一枚の画面に同時に時の経過を表わすが如く、時について無関心である。

9、概念的　言語表現に於て、大ざっぱな表現をする。概念的で、部分的で、中心的である。

絵画に於ても大人の絵が見える通り写実的なのに反し、幼児の絵は考える通りに描くのである。

10、省略　言語表現に於ける省略は、急ぐ時に現われる。「お母さん蛇がいましたよ」というのを、単に表を指さして「蛇々」という。焦慮は連発性のどもりになって表われることが多い。「お母さん、へへへび！」というようなものである。

絵画に於ける場合に、部分的省略が行われることが多い。

三

右にのべた諸事項について、幼児の絵画作品を提示して解説を加えることにしよう。

（幼児の作品の実例を示して説明をしたが、その絵画の掲載が出来ないので、そのうちの二三を絵画なしで説明のつくものをあげよう）

9、概念的であること

幼児に指遣人形芝居（ギニョール）で「舌切雀」を見せて、それを絵に描かせて見たが（実物提示）どの子供の描いたのを見ても、全部どの人物（お爺さん、お婆さん、雀）にも足がちゃんとついて描かれてある。

指導人形劇で足はないのであるが、幼児たちは足などを気にかけず（問題にせず）に、概念的な「お爺さん」概念的な「お婆さん」を描き上げてしまうのである。

10、絵画に於ける省略

園児の描いた紙芝居「ぼうけんぴんちゃん」

第一図　表紙
第二図　ぴんちゃんがモーターボートに爆弾をつむ
第三図　モーターボートは愈々出航
第四図　行く先は椰子の葉しげる南の島
第五図　大ジャングルの中に蛇がいた
第六図　ぴんちゃんは爆弾をとりに帰る
第七図　再びジャングルへ爆弾をもってやってくる
第八図　大蛇ののどくびへなげつけた。血はほとばしり出た
第九図　大蛇を退治したぴんちゃんは奥へ行く。大きな山の麓に一軒のあやしき家がある。何者の棲家でしよう

（紙芝居図面略）

1、ぴんちゃんが第五図に於て大蛇を発見した時には画面一面に丈なす草が生いしげって、椰子の木が三本生えていて葉がしげっている。

2、次にぴんちゃんが爆弾をとりに来る（爆弾は透視図的に箱に入っている）

3、爆弾を持って元の場所へ来る。大蛇は同じポーズでいる。この図にはジャングルの草が半分しか書かれてない。

4、爆弾をなげつける。大蛇ののどからは赤い血がほとばしり出ている。（但しなげた筈の爆弾はぴんちゃんの手に持たれている——時間的無関心を現わしているのである）この時には草もなくなり、椰子の木もすっかり描かれていない（草が右端の方に四五本かかれている切りである）

ぴんちゃんは早く大蛇を退治しなければならない焦慮で草や木を省略したのである。

四

以上幼児の絵画作品（本誌に写真版として載せられないのは残念であるが）と言語表現との関係について概説したが、左の如き結論を得るように考えられる。

①言語表現と絵画表現との間には関係がある。

②その関係は、類似の方向に進んでいる。

右の結論から、私たちの保育上に次のようなサゼスチョンが出るのではなかろうか。

①言語表現を絵画表現に移すこと、反対に絵画表現を言語表現に移す保育が可能であり必要である。

②言語表現のおくれている幼児は絵画表現の面から導いて、言語表現を伸ばすことに努めること。

③絵画表現の不充分な子供は言語表現から興味を誘導して、絵画表現を助けるようにすること。